

<オリエンテーション>

A. テーマ：キリスト教思想研究入門——近代から現代あるいはポストモダンへ

B. 目的

この特殊講義は、すでに系共通科目「キリスト教学講義」を受講し、キリスト教思想研究に関心のある学部生を対象に行われる。キリスト教思想研究を目指す際に身につけておくべき事柄について、またいかなるテーマをどのように取り上げるのかについて、解説を行う。

C. 内容

本講義では、前期後期ともに、まず、10 回程度の講義を行い、残り 5 回の授業において、受講者の研究発表を実施する。キリスト教学専修学部生（研究生も含めて）に対しては、この研究発表（一回の授業で、一人あるいは二人）によって、卒論指導を行う。

今年度は、近現代キリスト教思想の主要なテーマについて考察を行うことによって、現代のキリスト教思想の主要動向の理解をめざしたい。前期は、19 世紀から 20 世紀前半のキリスト教思想から、近代聖書学、自由主義神学（シュライアマハー、リッチェル、ハルナック、トレルチ）、キリスト教社会主義・宗教社会主義、弁証法神学（バルト、ブルトマン）、ティリッヒなどを取り上げる。

後期は、20 世紀後半以降のキリスト教思想から、解釈学的神学（ポスト・ブルトマン、リクール、ヴァッティモ）、政治神学（シュミット、モルトマン、アガンベン、ジジェク）、解放の神学（ラテン・アメリカの解放の神学、フェミニスト神学、黒人神学、民衆の神学、ピエリス）、科学論の神学（パネンベルク、プロセス神学）、宗教の神学（ヒック）、エコロジ神学などを論じる。

D. 確認事項

受講者には、前期と後期に、一回ずつの研究発表が求められる（一部、レポートに代えることも可能）。成績評価は、この研究発表によって総合的に行う。

受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（金 3・4）を利用するか、メール（Sadamichi.Ashina@gmail.com）で行うこと。

E. 授業スケジュール

前期：現代キリスト教思想研究 1 ——近代から現代へ

オリエンテーション——現代キリスト教思想の諸動向 4/11

1. 西欧近代とキリスト教 4/18
2. 自由主義神学 1 ——シュライアマハー 4/25
3. 自由主義神学 2 ——リッチェルとハルナック 5/9
4. 自由主義神学 3 ——トレルチ 5/16
5. ヘーゲルとヘーゲル主義 5/23
6. 近代聖書学と宗教史学派 5/30
7. キリスト教と社会主義 6/6
8. 弁証法神学 1 ——バルト 6/13

- 9. 弁証法神学2——ブルトマン 6/20
- 10. 弁証法神学3——ティリッヒ 6/27
- 11. 解釈学的神学とブルトマン学派 7/4
- 12. 研究発表 7/11
- 13. 研究発表 7/18
- 14. 研究発表 7/25

後期：現代キリスト教思想研究2——現代あるいはポストモダン

オリエンテーション 10/3

- 1. 解釈学的神学と現代思想 10/10
- 2. 政治神学1——シュミットとモルトマン 10/17
- 3. 政治神学2——アガンベン 10/24
- 4. 政治神学3——ジジェク 10/31
- 5. 解放の神学1——フェミニスト神学1 11/7
- 6. 解放の神学2——フェミニスト神学2 11/14
- 7. 研究発表 11/21
- 8. 研究発表 11/28
- 9. 研究発表 12/5
- 10. 解放の神学3——黒人神学 12/12
- 11. 解放の神学4——アジア 12/19
- 12. 宗教の神学とヒック 12/26
- 13. エコロジーの神学1 1/8
- 14. エコロジーの神学2 1/22

<現代キリスト教思想の諸動向>

(1) 問題領域：諸学問の相互連関の構成する知的世界

キリスト教思想を「神学」あるいはさらに「組織神学」に限定することは非現実的・抽象的。

- 1. キリスト教思想と神学→「神学」よりも広めに問題領域を設定する。
特に、哲学あるいは現代思想を意識する。
- 2. 神学諸学と組織神学→「組織神学」を軸にして、キリスト教倫理や文化論、倫理学、
として聖書学など。
- 3. ティリッヒ『キリスト教思想史』別巻二・三、白水社。
- 4. バルト『十九世紀のプロテスタント神学』上中下、新教出版社。

序言

- 1 近代神学史の課題について

第一部 前史

- 2 十八世紀の人間
- 3 十八世紀神学の問題
- 4 十八世紀のプロテスタント神学
- 5 ルソー 6 レッシング 7 カント 8 ヘルダー
- 9 ノヴァーリス 10 ヘーゲル

第二部 歴史

- 11 シュライエルマッハー 12 ヴェークシャイダー 13 デ・ヴェッチ
 14 カールハイネケ 15 バウル 16 トールック 17 フォイエルバッハ
 18 シュトラウス 19 シュヴァイツァー 20 ドルナー 21 ミュラー
 22 ローテ 23 ホーフマン 24 ベック 25 ファルマール
 26 コールブリュッゲ 27 ブルームハルト 28 リッチェル

（2）時代区分：いつから現代か？

5. 時代区分という問題

- ・ 解釈者の視点、問題設定に依存する。→「神学において」、現代はいつからか。
- ・ 仮説性
- ・ 複数のメルクマールを組み合わせること

6. 第一世界大戦以降（1920年代以降）という時代区分

1960年代半ばで、次の時代区分が設定できる。

7. 現代は、「近代」か？あるいは「ポスト近代」か？

8. そもそも「近代」とは何か？

「近代/ポスト近代とキリスト教」研究会

(<https://sites.google.com/site/kyotochristianstudies/home/modernity>)

（3）諸動向

9. 諸動向の枠組み → 思想のグローバル化とは何か。思想を規定する諸要因。

思想史と社会史

- ・ 教派
- ・ 地域あるいは文化圏
- ・ 思想史の諸潮流（類型）

10. 注意点

- ・ ドイツの位置づけ：ドイツ中心的なキリスト教思想史の叙述の必然性と限界（功罪）
19世紀から20世紀前半までのドイツ神学とその後。
- ・ リベラルなキリスト教思想に偏った叙述は、それほど正当化可能か。
- ・ 解釈者の視点、問題意識の問題性→共通の認識をどの程度まで、どのレベルで確保できるのか。学会あるいは研究会の意義。

<参考文献>

0. ツァールント『20世紀のプロテスタント神学』上下、新教出版社。
1. パネンベルク『組織神学入門』日本基督教団出版局。
2. モルトマン『二十世紀神学の展望』新教出版社。
3. 熊澤義宣・野呂芳男編『総説 現代神学』日本基督教団出版局。
4. 深井智朗『超越と認識——20世紀神学史における神認識の問題』創文社。
5. 森田雄三郎『キリスト教の近代性』『現代神学はどこに行くか』創文社。
6. 栗林輝夫『現代神学の最前線』新教出版社。
7. W. Pannenberg, *Problemggeschichte der neueren evangelischen Theologie in Deutschland. Von Schleiermacher bis zu Barth und Tillich*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1997.
8. 芦名定道「思想史研究の諸問題——近代日本のキリスト教思想研究から」
<https://sites.google.com/site/kyotochristianstudies/home/asia/journals>